

天台に於ける四禪

坂 本 廣 博

表題に四禪としたが、天台智顗の修道論を見てゆこうと意図するものである。智顗の前期の述作とされる「釈禪波羅蜜次第法門」(『次第禪門』)では、

二十五方便↓五停心觀↓四禪……

と次第して説かれ、円熟期の述作といわれる「摩訶止観」では、

二十五方便↓十境(十乘觀法)

の順に説かれる。二十五方便は両書とも大同である故、ここでは論じない。

まず「次第禪門」の五停心觀を見るに、「坐禪三昧經」に依ってか、五停心を開いて十五門禪として説くのである。

「次第禪門」 「坐禪三昧經」

一、阿那波那門 四、阿那般那三昧法門

数息善根 (初習行) 一心念数入息出息。

随息善根 (已習行) 念与息俱止一心一处。

觀息善根 (久習行) 数、随、止、觀、転觀、清淨。

天台に於ける四禪(坂本)

(T. 46. p. 495—a)

二、不淨觀

九想

背捨

大不淨

(T. 46. p. 495—b)

三、慈心觀

衆生緣慈

法緣慈

無緣慈

(T. 46. p. 495—b)

四、因緣觀

三世十二因緣

果報十二因緣

(T. 15. p. 273—a)

一、不淨觀

作破皮想、除却不淨、当觀赤骨人。

想却皮肉、尽觀頭骨上。

身中一寸心、却皮肉、繫意

五处。

(T. 15. p. 272—a)

二、三種慈心

慈及親愛。

慈及中人。

慈及怨憎。

(T. 15. p. 272—b)

三、三種思惟法門

生緣老死、無明緣行。

行緣識、識緣名色、……取

縁有。

一念十二因縁

無明縁行、行縁識、……生

縁老死。

(T. 46. p. 495—c)

(T. 15. p. 272—c)

五、念仏

念仏仏

五、念仏三昧

將至三仏像所、……諦觀三仏像

相好。

念報仏

三十二相、八十種小相。

念法仏

仏功德法身。

(T. 46. p. 496—a)

(T. 15. p. 276—a)

右のごとく対照することが出来よう。すべてが一致するわけではないが、大略同趣旨ということが出来、禪を行ずる場合の指針となるべく、最とも詳細な經典に依り著述されていることが読みとれるところである。

次に四禪は、「次第禪門」十六章の第七修証の中を、

一、世間禪相

四禪・、四無量心、四無色定。

二、亦世間亦出世間禪相

六妙門、十六持勝、通明觀。

三、出世間禪相

對治無漏、縁理無漏。

四、非世間非出世間禪相

の四門に分け、世間禪相の初に述べられ、そこでは四禪、四無量心、四無色定と続く修行階程の一として説かれるのであるが、亦世間亦出世間禪以後の諸禪相の次位を明す中では、

(亦世間亦出世間禪)

六妙門 此六妙門、位即無定。

(T. 46. p. 524—b)

十六持勝 此堅對三三界諸禪。

(T. 46. p. 528—c)

通明觀 此禪無別次位、猶是約根本四禪四空、立次

位。

(T. 46. p. 535—b)

(出世間禪・對治無漏)

九 想

或欲界攝、或初禪二禪攝、……繫脛脹等八想、欲界初禪二禪四禪中攝。三禪中衆多、故無是

想。

(T. 46. p. 537—a)

八 念

(一途入道法門)

十 想

(三種道)

八背捨

初背捨初禪攝、第二背捨二禪攝、第三背捨位

在三禪中。

(T. 46. p. 541—a)

八勝處

初二勝處位在初禪、次第三第四勝處位在二禪、後四勝處位在四禪。(三禪不立勝處)

(T. 46. p. 543—c)

十一 一切處

初八色一切處位在四禪中、次第九空一切處位在空處、……

(T. 46. p. 545—a)

九次第定

此位雖一往約四禪四空處及滅尽定、然實位通諸禪。

(T. 46. p. 546—c)

三三昧

此二種禪、名雖有異、而法相異同。

(T. 46. p. 547—a)

師子奮迅三昧 依^二九次第定、定入^三師子奮迅三昧。

(T. 46. p. 547—c)

超越三昧 因^二師子奮迅三昧、逆順出^三入超越三昧。

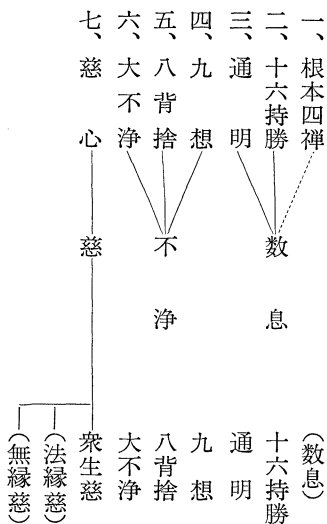
(T. 46. p. 548—a)

と、それぞれ四禪に依つて成り立つというのであり、四禪、四空処、滅尽定以外にはありえないといつても過言ではないようである。四禪、四空処も又、欲界の身に依つて成立することは当然である。ところで、「摩訶止観」では十境が、一、陰入境、二、煩惱境、三、病患境、四、業相境、五、魔事境、六、禪定境、七、諸見境、(八、上慢境、九、二乗境、十、菩薩境)の順に説かれるのであり、四禪をはじめとする諸禪は第六番目に説かれる。そこでは、

〔十門〕

〔五門〕

〔十五門〕



天台に於ける四禪(坂本)

八、因縁——因縁——三世

九、念仏——念仏——(果報)(一念)(法仏)

十、神通 (不^二專擅^三二法)

と分別され、⁽³⁾「次第禪門」に依るところ大であることは言うまでもない。次の問答、

次来意不同。問、此中十門与^二次第禪門及対治、云何同異。答、次第禪門為^レ成^二禪波羅蜜、禪善根利故、禪門先発、後驗^三善惡。此中為^レ成^二般若、禪善根鈍、先阻^三煩惱、遇^二業遭^三魔、後始発^レ禪。対治中為^レ破^二遮障、修^三成助道。今此任運自発、仍為^二観境。禪門雖同、各有^二其意^三。

この中、対治とは、五門対治の事禪と「輔行」に解釈されるのであるが、「次第禪門」に対しては、般若を成ぜんが為であり、五停心観に対しては、自から発するところを観境となすという点で、「摩訶止観」の観法たる所以があるというのである。

先の対照表で、四禪がどこに相当するかは明了でない。又、四禪を事禪、有漏。十六持勝、通明を亦有漏亦無漏である⁽³⁾といひ、これらを根本の実観であるとする。九想を出世の

客法^⑦といい、仮想の初門^⑧と述べているのである。又、八念、十想など、「次第禪門」に説かれ、「摩訶止観」には説かれな
い諸禪について、

所^⑨以不取^⑩十想者、前三見諦、中四思惟、後三無学。皆属^⑪理
攝故不^⑫取。不^⑬取八念者、有人修^⑭九想無怖、又念仏門已攝、
故不^⑮取。

と述べている。

ところで、「摩訶止観」の正修止観の初めに、

若過^⑯魔事、則功德生。或過去習因、或現在行力、諸禪競起^⑰。

といい、又、

禪有^⑱観支、因生^⑲邪慧、逸観^⑳於法、僻起^㉑諸倒、邪弁猛利^㉒。

と述べており、諸禪はそのまま認められるわけではないよう
である。

ひるがえって禪定境を見るに、

三明^㉓諸禪発相^㉔者、若般舟亦発^㉕根本^㉖而少。常坐等則多。今且約
レ坐論^㉗。

と説かれ、諸禪は常坐の問題であるという。即ち四種三昧が
ここで再び提起されていると見ることが出来よう。いうまで
もない常坐、常行、半行半坐、非行非坐の四であるが、諸
禪、特に四禪は常坐三昧に係る修行階程であるということ、
換言すれば他の三昧には別の修行階程がありうるということ
になるのではなからうか。慧を中心と考えるとき、空、無相

であればいいのであり、事として現われ易いところで、四禪
が説かれると考えることも出事^㉘よう。念仏三昧を上果^㉙を縁ず
といいかえていること、又、非行非坐三昧が、

覚者照了也。意者心数也。三昧如^㉚前釈。行者心数起時、反照観
察、不^㉛見^㉜動転根源終未來処去処^㉝。故名^㉞覺意^㉟。

と定義されることを考え合せ、「摩訶止観」では慧ないしは
理がテーマになっているといえるのではなからうか。

ここでは、三種止観といわれるもののうち、不定止観に相
当する「六妙法門」に言及していない。あらためて考察する
必要性を感じるものである。

- | | | | | | | | | | | | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| " | " | 「摩訶止観」 | " | " | " | " | " | " | 「摩訶止観」 | 「輔行伝弘決」 | " | 「摩訶止観」 | 「次第禪門」 |
| 卷二上 | 卷九上 | 卷九上 | 卷五上 | 卷五上 | " | " | " | " | 卷九上 | 卷九上 | 卷九上 | 卷九上 | 卷三上 |
| (T. 46. p. 14—c) | (T. 46. p. 118—a) | (T. 46. p. 118—b) | (T. 46. p. 49—b) | (T. 46. p. 118—a) | (T. 46. p. 118—a) | (T. 46. p. 117—c) | (T. 46. p. 118—a) | (T. 46. p. 117—c) | (T. 46. p. 117—c) | (T. 46. p. 412—c) | (T. 46. p. 118—a) | (T. 46. p. 117—c) | (T. 46. p. 496—b) |